

『キリストに結ばれて歩む』

コロサイ人への手紙2章6節

はじめに

「上にあるものを求めなさい」。コロサイ書3章のみことばを中心にして、コロサイ書全体のメッセージに聴きたいと願っています。そこで今晚は、コロサイ書2章6節、7節を中心に「キリストに結ばれて歩む」という信仰の生き方をともに教えられてまいりましょう。愛する皆さまに主の豊かな祝福がありますように祈ります。

1. キリストに結ばれて歩め

2章6節、7節。「あなたがたは、主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストに結ばれて歩みなさい。キリストに根を下ろして造り上げられ、教えられたとおりの信仰をしっかりと守って、あふれるばかりに感謝しなさい」。御子イエス・キリストの贖いの事実を示し、1章23節で「揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません」と命じたパウロは、それを受けて「キリストに結ばれて歩みなさい」と命じます。新約聖書において「歩む」という言葉は、「生きる」という意味でも使われる言葉です。ですから「キリストに結ばれて歩め」は「キリストに結ばれて生きよ」という命令です。パウロがこうしたキリスト者としての生き方についての命令を与える時には、絶えずその前提となる事柄があります。それは「あなたがたは、主キリスト・イエスを受け入れたのですから」という恵みの事実です。私たちは聖書の命令形をしばしば救われる「ため」にこうせよ、という言葉として聞きがちですが、聖書の語り口はそうではなく、むしろ救われた者「として」こうせよ、救われた者「だから」こうせよ、となっていることに注意したいと思うのです。すでに与えられている恵みの事実在即して、その現実にくさわしく。それが聖書の倫理的な命令形です。このことがよりはっきりと語られているエフェソ書の御言葉でも確認しておきましょう。エフェソ書4章1節。「神から招かれたのですから、その招きにふさわしく歩みなさい」。5章1節。「あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい」。5章8節。「あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい」。これらの命令形はいずれも、「招かれるため」でなく「招かれたのだから」、「神に愛されている子供になるため」でなく「神に愛されている子供ですから」、「光になるために」でなく「光となっています」であることを確かめていただきたいと思います。私たちはすでにキリストのものとしてされている。だからそのように歩め、そのように生きよ、と聖書は命じているのです。

次に「キリストに結ばれて」という表現にも注目したいと思います。「キリストに結ばれる」、「キリストにある」という表現は、パウロ神学の中心的な概念の一つといってよい重要なものです。これは神学の用語では「キリストとの結合」と呼ばれ、私たちに与えられている救いの全体像を示す重要な教理の言葉でもあり、キリストのうちにあって、キリストとともに生きるというキリストとの深い生命的な交わりの状態を意味しています。パウロは続く7節でこれを「キリストに根を下ろす」と言い換えていますが、キリストの中に「根ざす」とは、そのまま植物の幹と枝の関係のように生命的なイメージの表現です。つまり「キリストに結ばれて歩む」というのは、キリストの中に根ざし、キリストにしっかりと結び合わされ、キリストによって命の養いを受け、成長せられ、育て上げられていくキリスト者としての形成を意味しているのです。

2. 洗礼の恵みにとどまって

このように私たちはすでにキリストの救いを受け入れて、キリストに結ばれて歩むように召されているので

すが、しかし私たちが日々感じ取っていることから言えば、むしろそれにも関わらず、なお古い人のように罪の中にあり、罪との戦いに敗北を繰り返すということが多いのではないのでしょうか。それによって救いの確信も揺らぎ、喜びも薄まっていくということがあるのではないかと思います。救われてなお私たちを縛り続けようとするものがあるのです。コロサイの信者たちの中にもそのような戦いがありました。8節。「人間の言い伝えに過ぎない哲学、つまり、むなしいだまし事によって人のとりこにされないように気をつけなさい。それは世を支配する霊に従っており、キリストに倣うものではありません」。コロサイの信徒たちを縛りつけていたもの、それをパウロは「人間の言い伝えに過ぎない哲学、むなしいだまし事」と言っています。当時のコロサイ教会に起こっていた問題、それはこの「哲学」と呼ばれる教えが人々を惑わし、虜にしていたことなのです。コロサイ教会における「哲学」とは、ある種の禁欲主義、ユダヤ的な律法主義、そして一つの完結した宗教的な世界観でした。そういうものに捕らわれる人々のことを私たちは決して嘲笑うことはできません。いつの時代にもこのような誤った教えは存在するのですが、それはそれだけこのような教えの中に人々に対する説得力があることの現れでもあるでしょう。逆説的ですが、こういった類の教えは実は人間にとって魅力的であるということがあるのです。一つの完結したシステム、世界観の中に入ってしまうと自分で考えたりする必要がなくなるのであり、律法主義の中にいるほうが実は楽だということがあり得るのです。そしてこのような世界観は人を魅了し、その中に人を捕らえ込み、閉じ込めてしまうことができてしまうのです。

しかしパウロは言います。「それは世を支配する霊に従っており、キリストに倣うものではありません」。この「世を支配する霊に従っている」とは、この世にあって働く悪しき霊の存在を背景としたものと理解すべき言葉であり、続く15節の「もろもろの支配と権威」につながる言葉です。これもエフェソ書によって補足しておきたいと思いますが、エフェソ2章2節の「この世を支配する者、かの空中に勢力を持つ者、すなわち、不従順な者たちの内に今も働く霊」、6章12節の「支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊」とあるように、この世の世界観の背後に潜む悪しき霊の働きをリアルに捕らえたものといえるでしょう。私たちの生き方は、キリストに基づくものか、この世の霊力に属するか、その二つに一つなのであって、どっちつかずの中間地帯、中立状態はなく、必ずそのどちらかに属する状態でしかない聖書は教えているのです。では私たちはいまそのどちらに属しているのでしょうか。2章14節、15節。「神は、わたしたちの一切の罪を赦し、規則によってわたしたちを訴えて不利に陥れた証書を破棄し、これを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました。そして、もろもろの支配と権威の武装を解除し、キリストの勝利の列に従えて、公然とさらしものになさいました」。ここでパウロは、私たち信仰者の現実の中では救われてなおこの世の様々な誘惑や悪、罪の問題との戦いは続くのですが、しかしキリストにおいてはすでにその戦いに決定的な勝利が与えられていて、その最終的な決着は覆されることがないと言っています。

救われて、キリストのものとされて、しかしなお罪の中に生きてしまう私たち、この世の霊の支配下にあるように生きてしまう私たち、そのギャップによっていつも苦しむ私たち。しかしそれでもなお私たちはキリストに結ばれて生きているということのできる根拠が与えられているのです。11節、12節。「あなたがたはキリストにおいて、手によらない割礼、つまり肉の体を脱ぎ捨ててキリストの割礼を受け、洗礼によって、キリストと共に葬られ、また、キリストを死者の中から復活させた神の力を信じて、キリストと共に復活させられたのです」。私たちの救いの確信の根拠。それは洗礼の恵みであるとパウロは教えます。洗礼の恵みを思い起こし、そこで与えられた新しい生をしっかりと受け取って歩むこと。それが大切なことなのです。洗礼とはキリストとともに死に、キリストともによみがえらされることのしるしであり、キリストの中に接がれること、まさにキリストとの霊的な結合の現れです。このキリストとの生命的な結合は何によっても再び切り離されることはなく、むしろますます堅く緊密に結び合わされていくものです。また洗礼は、私たちが救われていることについての聖霊の保証でもあります。聖霊が私たちの証印となってくださり、キリストのものとしてますます私をキリストに似たも

のへとつくりかえながら新しいものさしによって生きる者へと養い育て続けていくくださるのです。

3. まことの自由への生

このように聖霊の恵みを受け、新しい者とされて、新しいものさしによって生きる生に招かれ、事実、いまその生に生かされておりながら、なお古い人のままのようにして生きることは、私たちに与えられている尊い宝なるキリストの価値を私たちがまだ十分に味わい知ることがなく、キリストにあって生きる真の自由を満喫していない、なんとももったいない状態にあることを意味しています。すでに無罪放免の宣告がなされているのに、まだ牢獄の中に自分を閉じ込めて不自由さの中にあるようなものです。コロサイの信徒たちはまさにそのような状態でした。20節から23節。「あなたがたは、キリストとともに死んで、世を支配する諸霊とは何の関係もないのなら、なぜ、まだ世に属しているかのように生き、『手をつけるな。味わうな。触れるな』などという戒律に縛られているのですか。これらはみな、使えば無くなってしまうもの、人の規則や教えによるものです。これらは、独り善がりの礼拝、偽りの謙遜、体の苦行を伴っていて、知恵のあることのように見えますが、実は何の価値もなく、肉の欲望を満足させるだけなのです」。

もし私たちが今なおそのようなこの世の生き方の中にいるならば、そのような生からきっぱりと訣別しなければなりません。もはや私たちにとっては「この世」が私たちの人生の目的、意味ではない。この世の生き方に縛られて生きることはない。さらに自由な生へと招かれているのです。その道に立つには悔い改めが必要です。聖書の教える悔い改め、すなわち上からのものによって向きが変えられ、方向転換すること。そのような真の自由に向かう生への転換こそが必要なのです。この転換を遂げる時、私たちの前に広がる世界は今までと違う新しい光の下に、その真の姿を現すことになります。それは律法主義や禁欲主義、霊と肉との二元論からの解放であり、被造物を被造物として受け取り、神と自分と世界を心の底から喜ぶことのできる生の始まりを意味します。パウロはⅠテモテ4章1節から5節でこう言っています。「しかし、霊は次のように明確に告げておられます。終わりの時には、惑わす霊と、悪霊どもの教えとに心を奪われ、信仰から脱落する者がいます。このことは、偽りを語る者たちの偽善によって引き起こされるのです。彼らは自分の良心に焼き印を押されており、結婚を禁じたり、ある種の食物を断つことを命じたりします。しかし、この食物は、信仰を持ち、真理を認識した人たちが感謝して食べるようにと、神がお造りになったものです。というのは、神がお造りになったものはすべて良いものであり、感謝して受けるならば、何一つ捨てるものはないからです。神の言葉によって聖なるものとされるのです」。また6章17節ではこうも言っています。「この世で富んでいる人々に命じなさい。高慢にならず、不確かな富に望みを置くのではなく、わたしたちにすべてのものを豊かに与えて樂しませてくださる神に望みを置くように。善を行い、良い行いに富み、物惜しみをせず、喜んで分け与えるように。真の命を得るために、未来に備えて自分のために堅固な基礎を築くようにと」。

私たちの主なる神は私たちを樂しませてくださる神である。神に喜ばれる歩みをしたいと私たちは願いますが、そのためにはまず私たちが神を喜ぶ、神ご自身を喜ぶことが大切です。そして神を喜ぶことのできる歩みは、神が私を喜んでくださるという恵みの事実によって始まるものなのです。

おわりに

キリストに結ばれて歩む。この命令を私たちは真の自由への生に招く声として聞き取りたいと思います。すべてをキリストに結びつけ、キリストを根拠とし、キリストによって建てあげられ、キリストと深く堅く結び合わされていくこと。「主キリスト・イエスを受け入れた」という恵みの事実根ざし、この事実からすべてを始めていくこと。ここに私たちの生き方の出発点があります。この恵みの事実立つ時、その道は広々とした平らな道となっていくのです。